

現代進化論と現代無神論

木島泰三（法政大学文学部／法政大学大学院人文科学研究科、非常勤講師）

本提題ではデネットの近著『呪文を解く——一つの自然現象としての宗教』(*Breaking the Spell: Religion as a Natural Phenomenon*, Viking, 2006)を中心に、デネット及びドーキンスに典型的に見いだされる現代進化論と現代無神論の浅からぬ結びつきを検討する。

最初に、現代の無神論の状況として「ブライト運動」と「新無神論」、および、よりオーソドックスな無神論者および不可知論者からのこれらの動きへの批判、という状況をごく簡単に紹介する。

次に、デネットの著作『ダーウィンの危険な思想—生命の意味と進化』(*Darwin's dangerous idea: evolution and the meanings of life*, Simon & Schuster, 1995 / 邦訳、山口泰司監訳、青土社 2001 年)および論文「無神論と進化論」(ed. by Michael Martin, *The Cambridge Companion to Atheism*, Cambridge UP, 2007 所収)によって、デネットの無神論または「ブライト」の立場(『ダーウィンの危険な思想』では「世俗的ヒューマニズム」と称された立場)の理論的基礎を示す。特に、デネットの「万能酸の浸食」史観とでも言うべき、神学的、宗教的世界像から科学的、自然主義的世界像への、ダーウィン主義を媒介とした転換という、独特の思想史観の説得力を検討したい。

続いて『呪文を解く』に即して、二つの問題を取り上げ、検討する。

第一は、同書第二部でなされている、進化生物学を中心とした「自然現象としての宗教の科学的解明」の諸々の試みの紹介と検討である。ここではデネットの手引きに従い、最近の諸成果の紹介を通覧し、次いで古代以来たしかに存在していた「宗教の自然主義的解明」の伝統に対するこれらの研究の連続性と新しさの所在を考察する。

第二は、同書の第三部を中心になされている、宗教の倫理的機能に関する批判的検討である。これに関しては、代表的な進化生物学者の宗教観・倫理観とデネットのそれとの比較も行いつつ、デネットの企図がどの程度ヨーロッパの宗教批判の伝統を受け継ぎ、またどの程度新しいものであるかを考察する。

以上を通じ、現代進化論と現代進化論の結びつきの偶然性または必然性を概念的かつ思想的に考察できればと考えている。